そびえ立つ磚積擁壁（せんづみようへき）

今秋、平城宮跡資料館では特別展「地下の正倉院・第一次大極殿院のすべて」を開催します。50年にもおよぶ第一次大極殿院地区の発掘調査成果の集大成をまるごとお見せする予定です。

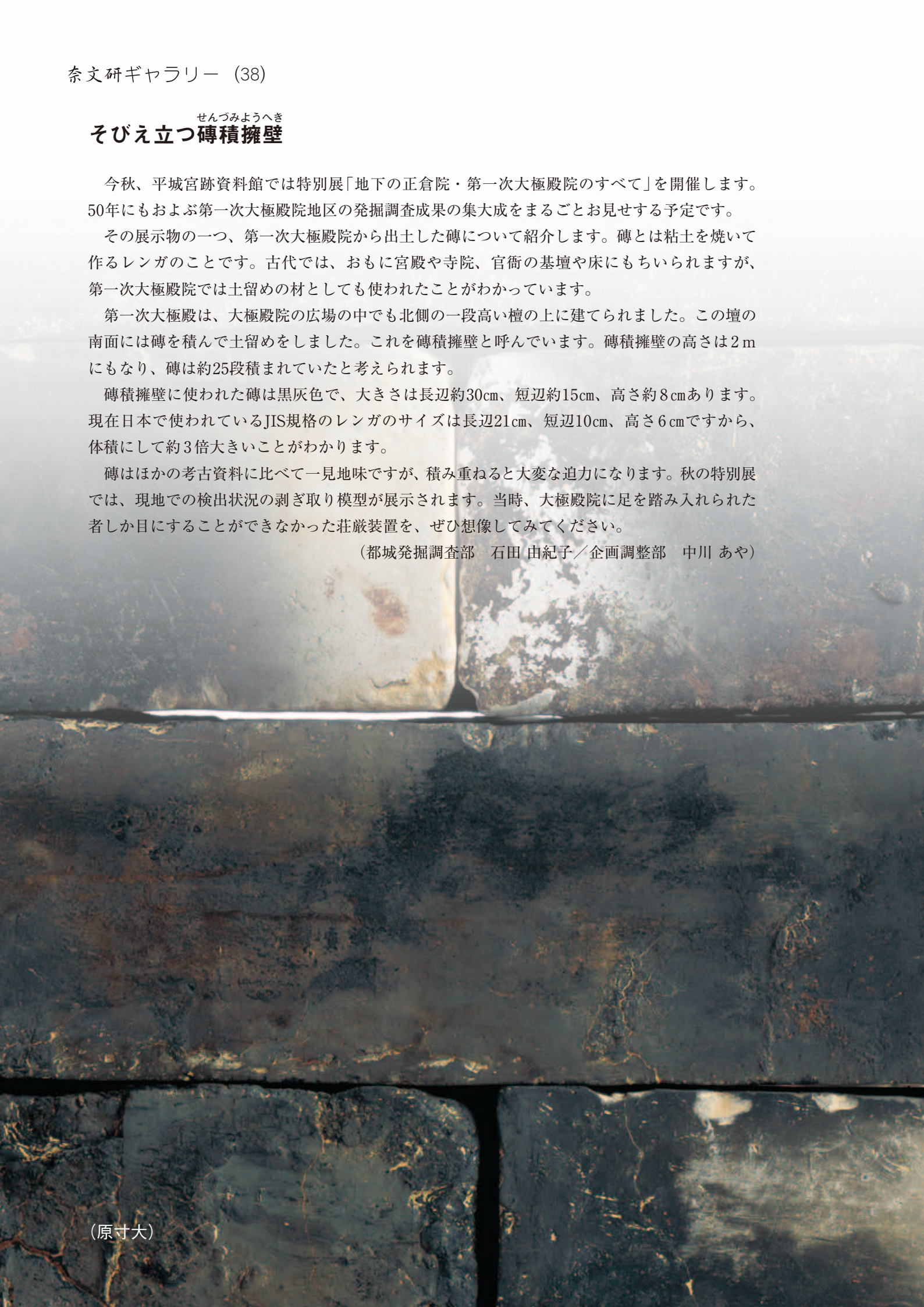
その展示物の一つ、第一次大極殿院から出土した磚について紹介します。磚とは粘土を焼いて作るレンガのことです。古代では、おもに宮殿や寺院、官衙の基壇や床にもちいられますが、第一次大極殿院では土留めの材としても使われたことがわかっています。

第一次大極殿は、大極殿院の広場の中でも北側の一段高い檀の上に建てられました。この壇の南面には磚を積んで土留めをしました。これを磚積擁壁と呼んでいます。磚積擁壁の高さは2ｍにもなり、磚は約25段積まれていたと考えられます。

磚積擁壁に使われた磚は黒灰色で、大きさは長辺約30㎝、短辺約15㎝、高さ約8㎝あります。現在日本で使われているJIS規格のレンガのサイズは長辺21㎝、短辺10㎝、高さ6㎝ですから、体積にして約3倍大きいことがわかります。

磚はほかの考古資料に比べて一見地味ですが、積み重ねると大変な迫力になります。秋の特別展では、現地での検出状況の剥ぎ取り模型が展示されます。当時、大極殿院に足を踏み入れられた者しか目にすることができなかった荘厳装置を、ぜひ想像してみてください。

（都城発掘調査部　石田 由紀子／企画調整部　中川 あや）



（原寸大）

姿を現した磚積擁壁（大部分の磚は失われていた）